

2011年度図書館実習学生報告

秋 元 真由子

(文学部史学科 4年)

(実習館：狭山市中央図書館)

今まで利用者の立場からの図書館しか知らなかったのですが、図書館実習に行き、今までよりも図書館について深く知ることができました。最初は何もわからなかった私ですが、図書館の方々のあたたかい支えがあって、無事に実習を終えることができました。

実習を受け入れてくださったのは、狭山市立中央図書館です。狭山市立中央図書館は市の中核を担う図書館であり、市内に移動図書館も巡回させています。

今回の実習で、図書館の様々な業務に関わらせてもらうことができました。まずは基本となるカウンター業務を学びました。貸し出し・返却・予約処理などカウンターは単純な業務と思われがちですが、利用者の方と直接触れ合う大切な業務であると改めて実感しました。自分が伝えたいことをどのように伝えれば一番わかりやすいか、ということのを常に試行錯誤しながら利用者の方と接しました。

また、新刊本の受け入れ作業では、本が図書館に並ぶまでに多くの手間がかかっていることを知りました。利用者の立場から見れば図書館に本があることは当たり前ですが、その裏に図書館員の仕事がたくさんあります。ほかにも小学校に出向いてのブックトークや、移動図書館にも同行させてもらうことができました。そして、気持ちよく図書館を利用してもらうためには館内の整備も重要だと学びました。本を探しやすいように書架を整理したり、案内表示があったりと、目立つことではないのですが利用者の方への配慮が感じられました。

実習を通して印象に残っていることがいくつかあります。まず利用者の方への対応についてです。実習の始めのころは、とても緊張してしまいしどろもどろになってしまったこともありましたが、慣れてくると利用者の方と会話するのが楽しみになってきました。また、相手の話

をしっかりと聞くことの大切さも学びました。相手の方の探しているものを明確にすることによって、より早く正確に提供することができます。そして、公共図書館なので子供から質問されたこともたくさんありました。しかし私には、最近の児童書についての知識があまりなかったので困ってしまいました。周りの職員の方は、児童書から一般書まで幅広い知識を持った方々ばかりで、私がわからないことを助けてくださいました。図書館についてだけでなく、資料についてももっと勉強していくべきだったと反省しました。

二つ目は移動図書館についてです。私は今まで移動図書館を利用したことがなかったのですが、たくさんの利用者の方がきてくれるのを見て、移動図書館の重要性がわかりました。また、移動図書館に積む本の補充もやらせていただきました。移動図書館に積む本は定期的に入れかえるというお話を聞き、提供する資料が偏らないようにという図書館側の配慮がよくわかりました。

最後は、図書館は地域の情報センターであると気づいたことです。図書館は本を読みに来るところというイメージがありますが、その地域の情報を一挙に集めた場所でもあると思います。新聞から狭山市についての記事を集めたり、狭山市出身の作家の方の資料を別置したり、地域に根付いたコレクションになっています。「地域について調べるなら図書館へ」という姿勢に感銘しました。

二週間という短い時間でしたが、とてもたくさんのことを学ぶことができました。図書館の根底には「利用者のために」という強い思いがあることを感じました。この志を見習って精進していきたいと思います。狭山市立図書館の皆様、また講座の先生・事務の方には本当にお世話になりました。ありがとうございました。

中 田 ひとみ

(文学部文学科日本文学専修4年)

(実習館：東京都葛飾区立中央図書館)

私は公共図書館である東京都葛飾区立中央図書館というところで2011年10/4～10/20の約2週間、間に4日間お休みを頂き計13日間の実習をさせて頂きました。葛飾区立中央図書館で実習希望を出した理由として、こちらの図書館は自宅から近いので以前からよく利用させて頂いていたこと、2009年に開館したばかりの新しい図書館だということがあります。例えば自動貸し出し機や自動返却機等最新の設備や機械が導入されていて、土地柄、利用者の中にはお年寄りの方も多く、バリアフリー等が考慮された作りになっています。そのような環境の中で新しいサービスや図書館の仕事というものが体験出来たら良いなと考えました。

こちらは中央図書館なのであらゆる層の利用者の方を対象にしながら、専門的な資料の収集にも努められています。蔵書数は一般書が約19万5千冊、児童書が約2万7千冊、雑誌約430タイトル、新聞約35紙、AV資料約6300点所蔵されています。特徴としてはビジネス支援コーナーや医療コーナーを別に設置していることや、葛飾区という地域の特徴である映画「男はつらいよ」で有名な柴又の「寅さん」、水元公園や堀切菖蒲園から「花菖蒲」、葛飾区はキューピー人形やリカちゃん人形を立石で生産していることから「おもちゃ」等をテーマとした地域資料を特別コレクションとして収集し、別にコーナーを設けて展示しています。もうひとつの特徴としては、大体の図書館では恐らくNDC日本十進法に基づいて0～900番台で順番に資料が配架されていると思います。しかしこちらの図書館では、利用者の方がより使いやすいように、例えばビジネス関係は別にWという頭文字記号を付けていること、料理や子育てなどの500番台の資料は利用者の方がすぐに手に取れるように入り口付近に配架されていたりと、必ずしも番号通りに並んでいないことです。その為、番号順に探そうと思うと図書館も広いのでなかなか

か探しにくいというのは少し欠点となってしまいうのかもしれませんが、利用していくうちに慣れてくるとこちらの方が利用しやすいのかなあと感じました。

職員は24名、非常勤職員が9名、館長1名の合計34名の職員の方々が働いていらっしゃいます。その中で非常勤の方も含めて、司書の資格を持っている方は7名とうかがいました。この方々は主に内的なお仕事をなされており、他館の地区・地域図書館と大きく違う点として、図書館の表立っている主な仕事である貸出・返却の処理や資料の配架を行っているのはTRC(図書館流通センター)という委託の方々が行っていることです。日によっても違うそうですが、メインカウンターやフロアには大体12、3～20人のTRCの方がいらっしゃいます。

サービスとして、先ほども少しお話しましたが子どもからお年寄り、障害を持った方もみな同じように利用できるユニバーサルデザインの施設となっています。例えばトイレの個室全てにベビーキープがついていること、エレベーター下りてから正面カウンターまで点字ブロックが敷設されていること、館内の書架の高さが150cmに抑えられていることで資料を手に取りやすく見通しが確保され、その上死角を作らないようにカウンターが配置されていることで犯罪等を防ぐといった工夫がなされております。何といても一番感心した部分は自動貸出機、自動返却機、予約棚を使うことによって他人を介さずに自分一人で資料を手に入れるということが出来る点です。もちろん、使い方がわからないという方にはTRCや職員の方が丁寧に教えてくださいますが、使い方を覚えてしまえば、他人に知られたくない本を借りるとき、例えば何かガン等の重い病気にかかってしまった方がいるとします。普段利用している図書館だけに職員の人にも知られたくない、と思われる方もいると思いますが、誰にも知られずにその病気に

ついでの本や実際にかかった方の闘病記を借りる、自分1人で貸出、返却、予約を行うことが出来ます。予約に関しても予約棚というものがあって、葛飾区立図書館のHP上や図書館の機械端末で資料を予約し、資料が届いたら電子メールで連絡がきて、自らの手でその資料を取りに行くことが出来ます。葛飾区内の他の地区・地域図書館ではいまだにカウンター業務は職員の方が行っていますが、中央図書館では利用者の方のプライバシーを重視しているというお話を伺いました。

サービスの課題として伺ったことや実習をしている中で残念に感じたことは、最新機器、主にハンディキャップサービスとしてある読書支援機器があまり活用されていないことです。例えば利用者の方が音声でのやり取りで区内のハンディキャップサービス資料を検索できる機械や、文字拡大と資料の読み上げの出来るハンディキャップ対応パソコン等が設置されているにも関わらず、実習期間中にそこでその機器を利用されている方は見かけられず、職員の方もあまり利用しているの見かけていないということでした。

恐らく周りにもこのサービスが認知されておらず、利用したくても使い方が分からないのではなかなか一歩が踏み込めない方が多いのではないかと考えました。せっかく最新機器がそろっているのもっと活用する方が増えたら良いなあと思います。

ここから実習に関しての話に入ります。葛飾区立中央図書館では10月は丁度事業が多い月でもあり、私も様々な事業に参加させていただくことが出来ました。みなさんの思い浮かべるようなカウンター業務はこちらの図書館では端末の使い方を教わる以外は一度もしませんでした。カウンター業務は葛飾区内にある地区図書館の新宿図書センターというところで1日お世話になり、実際に返却図書の配架や資料の貸出、返却、予約などを体験させていただきました。こちらでは実際に利用者の方と接することが出来て、

私の研修中の札を確認なさると応援して下さる方もいたので、とても地域に密着していると感じました。

様々な実習をしていく中で特に印象に残った仕事は、新刊図書の選定会に参加させて頂いたことです。本の選定会は1週間に4,500冊ほどの本が入ってくるので週に1回、区内の図書館職員の代表の方が中央図書館に集まり、どの本を買う、これは買わない、買うのならば何冊どの図書館に置くのかというのを1冊1冊軽くプレゼンテーションを行い、話し合って決めます。私も実習生の身でありながら30冊ほどプレゼンテーションをさせて頂きました。事前に端末で書誌情報に軽く目を通し、その中から参考になる文章やキーワードをメモして選定会の時に発表しました。私に割り振られた冊数は少ないですが、初めてのことで短時間で30冊もの本に目を通して中身をさらしておくという作業はなかなか難しく、選定会の際にも周りの職員の方に補助してもらいながらのたどたどしいプレゼンテーションになってしまいました。けれど選定会に参加させて頂くなんてなかなかない機会であり、とても貴重な経験をさせて頂き嬉しかったです。

他の図書館での実習がどのようなものかはわかりませんが、私は毎回ほとんど同じ仕事をするのではなく、毎日新鮮な気持ちで実習させて頂きました。実習生だからといって遠慮せずに自分から何か仕事を求めることで、新たなお仕事を手伝わさせて頂けたり、疑問に思ったことは伝えれば何でも教えて頂けるので、自ら積極性を持って実習する姿勢でいれば周りの方もそれに応えて指導して下さいます。授業で習ったことはもちろん必ず役に立ちましたが、やはり現場で実際に働いてみると新たに気づくこともたくさんあります。実習に行く前はみなさんも不安だと思います。しかし勉強することも大切ですが、熱心に学びに行く姿勢が重要だと思いました。これから実習に行く皆さんもぜひ頑張ってください。

古 庄 も も

(文学部文学科ドイツ文学専修4年)

(実習館：国立音楽大学附属図書館)

1. はじめに

私は国立音楽大学の附属図書館で10月4日から14日まで実習させていただきました。私の実習館はいろんな意味で特殊でした。まず公共図書館ではなく、大学附属の図書館であり、しかもその大学は音楽に特化した単科大学でした。そのため他の図書館に行った人と比べると少し変わった実習になりました。今回は実習をして音楽図書館ならではのなと思ったことを掻い摘んで紹介しようと思います。

2. 図書館概要

まず国立音楽大学附属図書館の概要を蔵書、利用者、サービス、職員体制という4つの点からまとめたいと思います。

蔵書は音楽図書館の特異性が最も顕著に表れていると思います。実際に数字を挙げると、図書が142,000冊、楽譜が135,600冊、雑誌が2,600タイトル、AV資料が79,500点(2010年3月現在)と、一般の図書館にはない楽譜資料の数が多いことが分かります。楽譜以外の図書といっても音楽学研究に使うものや音楽に関係するものがほとんどで、一般図書は他の図書館より少ないと思います。雑誌は一般の図書館に比べると種類が少ないかも知れませんが、このほとんどが音楽を主題としたものなので、音楽雑誌に関しては網羅的に収集していると思います。AV資料も充実していて、DVDやCDはもちろん、レコードやカセットなどもたくさんありました。こうした一昔前の録音資料も、その形でしか残っていない貴重な資料である場合があるので、古くなくても現役で利用されていました。私が音楽図書館ならではのこととして注目したのは、資料の収集における観点がさまざまであるということです。例えば同じ作品でも、演奏者や録音年が違えば別の資料として収集しなければならないので、一つの作品に対して複数のコレクションがありました。そして、図書

や楽譜も含めこれらの資料のほとんどは閉架でした。なぜなら利用のほとんどは楽譜で、楽譜は管理が大変だからです。楽譜のほとんどは一般書籍のような表紙がついていないので、痛みやすく、パート譜のあるものなどは複数の冊子が紙に挟まっているだけの状態のもので、そういったものを確実に管理するために閉架にしています。

利用者は国立音大の学生、教職員はもちろんですが、そのほかに外部利用者が目立ちました。音楽の専門図書館としての一面も持っているので、音楽学研究者や趣味で利用する地域の方も多く見られました。学生は利用のほとんどが授業に使う楽譜の貸出でした。立教大学の図書館とは違い、館内で勉強している学生を見ることはほとんどありません。音楽大学の図書館は学習スペースというよりは授業やサークルでの演奏に必要な資料を貸し出す場所としての役目が強いと感じました。休み時間には楽譜を借りにどっと学生がくるので、館内の人の動きにかなり波がありました。

サービスについて、TAC(多摩アカデミックコンソーシアム)を紹介したいと思います。これは立教大学の図書館が加盟している山手線コンソーシアムのようなもので、多摩地区の5つの大学で結んでいる大学協力機構です。他に国際基督教大学と津田塾大学と武蔵野美術大学と東京経済大学が加盟しています。それぞれ主題の違う大学が集まっているので、コンソーシアム全体で一つの総合大学の役目を果たしていて、とても効果的だと思いました。

職員体制は、図書館員が18人と曜日や時間ごとに交代でパートタイマーで構成されていました。大学の図書館では図書館業務は外部に委託しているところもありますが、国立音大の図書館では図書館員は大学職員で、交代で貸出・返却カウンターに立つこともありました。

3. 実習日程

実習日程や内容については、おそらく一般の図書館ではあまり体験できない目録作成と貴重書と修復について説明します。

2日目に音楽資料の目録作成の実習をしました。実は日本の目録規則は音楽資料に適用するには不十分で、国立音大の図書館はアメリカの規則にしたがって独自に目録を作成していました。一般の図書館で目録作成の実習をやらせてもらえるところはほとんどないと思うので、とても貴重な体験になりました。また、国立音大はOPACも特殊で、音楽資料をより限定して検索するために独自に作成されていました。詳細検索で普通は著者や出版者などで資料を限定していきますが、音大図書館では楽譜の検索が多いので、楽器編成や作曲者、曲タイトル、編曲者から検索することができます。また、同じタイトルの楽譜でも種類があります。例えば同じモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」の楽譜を例にとっても、オーケストラ演奏するためにはパート譜、指揮者にはミニチュアスコア、歌うには歌詞つきの声楽パート譜、モーツァルト研究のためには直筆譜のコピー（ファクシミリ）など、同じ楽曲を扱っている楽譜でも、利用者は用途によって求めているものが違います。そういったニーズにも応えられるようにOPACにはさまざまな工夫がありました。

8日目には貴重書についてお話を伺いました。貴重書は19世紀以前の印刷譜や1850年以前の音楽書などです。貴重書には貴重書の目録があり、それを作成するためにさまざまな研究がなされていました。例えば古くなって印刷が薄れ書いてある文字がわからなくなってしまった外国の楽譜の目録を作るために、研究書を読んで解説する作業なども図書館員が行っていました。

9日目には資料の修理の実習をさせていただきました。特に多かったのは楽譜の修理です。楽譜は読むのではなく、それを使って演奏するので、痛み方に特徴がありました。また音楽学の研究に使われるような貴重書は、なるべく原型を留めたまま利用できる状態に修理しなければならず、「修理」というよりは「復元」に近いような感じでした。私も実際に古い本をいくつか修復させていただきました。

4. 感想・考察

実習前は二週間は長いと思っていましたが、終わってみると案外早かったように思えます。音楽大学の附属図書館ということで、一般の公共図書館とは一味違った実習になるのではないかと考えていましたが、想像以上に専門性が高かったです。利用者も図書館員もある程度音楽に精通しているので、求められるサービスも音楽知識が前提とされているケースが多く驚きました。また、音楽に関しては日本よりも海外の資料が圧倒的に多いので、図書館員は日常的に英語とドイツ語に向き合っているのが印象的でした。またこうした専門性の高い資料を扱っているのも、OPACを使った検索方法も複雑で、そのために司書がとても必要とされている図書館だと思いました。私は音楽学に興味があるので、実習中は宝の山に囲まれている状態でした。実習と言いつつも、貴重楽譜を見せていただいたり、CDを借りたりと、私自身とても有意義に図書館を活用していました。ちなみに卒論の参考文献もかなりお世話になりました。立川にあるので通勤に2時間弱かかりましたが、そんなことも気にならないくらい毎日楽しく実習させていただきました。

そして後日談もあります。実は今回の実習を通して図書館員の方に採用のお話をいただき、晴れて4月から国立音楽大学附属図書館の図書館員として働くことになりました。私はもともと大学職員を目指して就職活動をしていて、実習館に大学図書館を選んだのも大学で働くことに興味を持っていたからでした。国立音楽大学は今年度の新卒採用は行わない予定でしたが、実習でお声をかけていただき、急遽12月から選考を受けることになりました。ありがたいことに図書館長の推薦という形だったので、簡単なエントリーシートと二回の面接だけの異例な選考になりました。最終的に内定が決定したのはクリスマス前だったので、それまではもとの内定先で大学職員になるか、国立音大で図書館員になるかかなり悩んでいました。司書課程を履修したのも、実際に司書になろうと思っていたからではなく、純粹に学問として図書館学に興味があったからなので、まさか自分が司書資格を生かせる仕事につくなんて考えもしませ

んでした。しかし、実習を通して音楽図書館の魅力を知り、大学で学んできた音楽学と図書館学を最大限生かせる職場であると感じたので、司書になることを決意しました。まさに瓢箪から駒、棚からぼた餅です。これは本当に特殊な

例なので、参考にならないかもしれませんが、ただ資格を取るための実習にするのではなく、少しでも自分の興味関心のある図書館を選べば、より実りある実習になり、将来何らかの形で生かすことができるかもしれません。

渡 邊 由 佳

(文学部キリスト教学科3年)
(実習館：ふじみ野市立上福岡図書館)

1. 図書館概要

今回私は、埼玉県ふじみ野市にある、「ふじみ野市立上福岡図書館」で実習をさせていただきました。上福岡図書館は市内3館のうち、最も大きい図書館です。周りは中学校やマンションが多く、夏休みということもあり、子供連れの親子の利用者が多い印象を受けました。

蔵書点数は、移動図書館含め、342,247点です。職員は12名で、司書資格を持っているのは8名です。その他、ボランティアの方や、委託業者が数名働いています。

代表的なサービスは、レファレンスサービス、コピーサービス、ノートパソコン貸し出し、団体貸し出し、おはなし会、映画会、お楽しみ会、対面朗読、郵送貸し出しなどがあります。

開館時間は、9:30-17:00 火・金曜は19:00まで、月曜日は休館日です。

2. 日程

私は、8/16(火)～8/20(土)、23(火)～26(金)、9/3(土)の計10日勤務しました。日、月曜はお休みをいただきました。勤務時間は8:30-17:15までで、18(木)だけ10:30-19:15でした。

業務内容

主に、①普段なかなか行わず、今回実習生が行う業務；②利用者との間接的なサービス；③利用者との直接的なサービスの3つに分けられます。

①

- ・アンケート入力

事前に市民に取っていたアンケートをエクセルに入力していく作業です。アンケートは約1,000枚収集されていました。内容は、市内3館ある図書館それぞれ利用している時間帯やサービスなどの評価や、指定管理制度に関するアンケートです。

- ・視聴覚資料修理（研磨）

音飛びや傷の付いたCD等を、専用の機械にかけて修理していく作業です。

古いものは仕方がないですが、傷の付いたCDがたくさんあって残念でした。利用者が気持ちよく読んだり、聞いたりする為にも、修理は大切なことだとつくづく感じました。

②

- ・相互借貸返却

近隣の図書館から借りてきた資料には、自館のカバーをかけて、上福岡図書館で貸し出せるようにします。反対に、他館に貸し出していた資料が返ってきたものには、紙に返却された日付のハンコを押し、書名順に並べました。

近隣の図書館だけでなく、県内のあらゆる図書館と相互借貸をしていて、ネットワークの広さに驚きました。

- ・排架

本を書架へ並べる作業です。絵本の多さ（全体の約4割の79,600点）には驚きました。

棚がキツキツの状態だと、利用者が本を取り出しにくくなってしまうので、無理に入れずに下の棚に移してから入れるようにと、アドバイスをいただきました。常に利用者の目線に立って、利用しやすいように整理しなければならな

いと感じました。

・予約資料拾い

朝一番、開館前に行う作業で、前日に入った予約の資料を書架から拾ってくる作業です。NDC順に並んでいない場合も多く探すのに苦労しました。

当初は一冊探すのにとても時間がかかりましたが、何日もやっていくうちに場所も覚えてきて、スムーズに探せるようになりました。私がどうしても見つからない本を、職員の方が素早く見つけ出す姿を見ると、やはり経験の差を感じました。

・資料の発注

見計らい本の中から図書館に置く本を決め、分類番号を付けていきます。

番号は図書館によって微妙に異なり、例えば、日記や記録の「916」でも、闘病日記や、戦争体験など様々なジャンルがあるので、916ではなく、そのジャンルごとに分類しました。

タイトルだけでは分類できないものもあり、本文まで熟読しなければならないので大変な作業だと感じました。

・新聞チェック

郷土資料の為、ふじみ野市や図書館に関する記事がないかどうかを毎日チェックします。職員の手が足りていない為、ボランティアの方がやる日もありました。

③

・カウンター

資料、ノートパソコンの貸し出し、視聴覚資料の操作を行います。ただ、バーコードを通しだけの作業ではありますが、ミスが出ないように慎重にやりました。

夏休みだったので、小中学生や、小さい子供連れの親子が多かったです。貸し出し冊数の20点ぎりぎりまで借りる利用者が多く、うれしく思いました。

・レファレンス実習

職員の方が、「日本の桜の開花の時期はいつか？」というレファレンスの例題を用意してください、自分たちで回答を探しました。

何から探せばいいのか全くわからなかったけ

れど、とりあえず植物の大事典や、花の図鑑などを見ましたが、全然載っていませんでした。答えは理科年表に出ていました。時間もかかってしまい、これが実際に利用者からの質問だったら、と考えると、レファレンスサービスの勉強をもっとしていればと後悔しました。

・読み聞かせ

毎週水曜日と、金曜日に、0～3歳向けにはなし会で読み聞かせをしました。自分で1、2冊選書をし、読み聞かせました。また、手遊び歌も行いました。

絵本を選ぶときは、文字がなるべく少なく、絵だけでストーリー性があるものがよいと教えていただきました。

実習2日目でいきなりの読み聞かせだったので、とても緊張しましたが、これもやはり慣れで、最後の方になると、とても楽しく読み聞かせすることができました。

また、近所の保育園のお誕生日会で、100人近くの子供達の前で読み聞かせをする機会も設けてもらい、とても良い経験になりました。

3. 感想、考察

今までの総括として、実習臨みましたが、基礎知識が頭に入っているつもりでも、実際に現場に立つとわからないことばかりでした。しかし、たくさんの発見があり、貴重な体験ができました。

カウンターや読み聞かせなど、実際に人と接することによって、図書館サービスとは、利用者なしでは成り立たないものだと実感しました。だからこそ、常に利用者ニーズに答えていくことが図書館に求められていると思います。

また、図書館の仕事は、利用者から目に見える作業はごく一部で、裏では、選書から始まり、発注、登録その他受入作業など、資料が利用者の手に届くまでたくさんの業務があることに驚かされました。

仕事量も多く大変ですが、職員同士や、他の図書館との連携プレイで行われていることが良く理解できました。コミュニケーションや、地域ネットワークの重要性が改めて理解できました。